

行動パターンと住まい方からみる アクティブシルバーのライフイノベーションに関する研究

A STUDY ON THE LIFE INNOVATION OF ACTIVE-SILVERS FROM THE VIEWPOINTS OF ACTIVITIES AND LIVING STYLES

建築計画分野 岩永和也
Architectural Planning Kazuya IWANAGA

団塊世代を中心に旧来の高齢者とは異なる新しい価値観やライフスタイルを志向し、生活を主体的に組み立てる高齢者‘アクティブシルバー’に先駆的に着眼する。行動パターンと住まい方の視点から、ヒアリング・訪問調査をもとに詳細な生活実態を把握し、それら視点の関係性を解析することでライフスタイルを明らかにする。加えて彼らが身体機能が低下した時に所望する生活とライフスタイルとの連関の考察も行った結果、従来の受動型福祉から協働型福祉への移行を提起することができた。

I pay attention to the new elderly in the middle of ‘Active-silver’ -the elderly who have new value and life-style completely different from the old elderly’ s and live independently-. The purpose of this study is to clarify life-style by understanding the detail life actual situation by investigation of hearing and visiting from the viewpoints of activities and living styles and analyzing the relationships between them. Moreover, this study of relationship between lives they hope when they decline their physical abilities and life styles resulted in exposing that the enhancing of the community-based support is not necessarily needed and bringing up changing from old passive welfare to cooperative welfare.

1. はじめに

1-1. 研究の背景

2015年には団塊の世代が前期高齢者となったことで、高齢化率が26.0%と過去最高となった。そうした社会情勢の中、旧来の社会的弱者とは異質の価値観とライフスタイルを有し、趣味・余暇活動や社会活動などに積極的に取り組みながら、生活を主体的に組み立てる高齢者が増加しており、そうした実態と高齢者を一律に支えられる人と捉える既存の思考には乖離が見られる。それを踏まえると、既往の介護を重視した高齢者向け施設の設置理念・計画手法や社会福祉政策では間尺に合わない可能性があり、こうした実情のもとで、持続的に活力ある生活を営んでいける環境を整備することが、今後の社会における喫緊の課題と言える。

1-2. 研究の目的

そこで本研究では、趣味・余暇活動または活発な交流活動を積極的にはかる高齢者をアクティブシルバー(以下、AS)と定義する。そして、彼らの生活行動のパターンと住まい方に着目し、それらの関係性を見出し特徴を明らかにする。加えてASが仮に身体機能が低下した際の過ごし方の所望を表し、彼らが展開するライフスタイルとの連関を考察をした上で、従来の政策・制度の課題解決をすることを目的とする。

1-3. 研究の位置付け

高齢者の生活行動や住まい方に関する研究は膨大にある。生活行動に関しては、尾崎(2009)¹⁾らは、ある特定の地域において、高齢者の生活行動と居場所の特性から地域施設との関連を明らかにすることで、その地域の問題点や将来的計画の示唆を与えている。一方で住まい方に関しては、持田(2014)²⁾らは、地域での交流が暮らしに最も影響を与えるのが高齢者であるという前提のもと、住まい方を通じ、居住継続のための地域交流を検討している。

しかしながら、生活行動と住まい方の双方を視点に高齢者の生活様態と住生活の実態分析や、それらの考察を進めた研究は少ない状況である。本研究は、
・自立高齢者の中でも、特にASを対象としている点、
・ASの生活行動のパターンと住まい方の両側面の実態を詳細に把握しようとしている点、
・それらの関係性からASのライフイノベーションを実証しようとしている点、
などにおいて既往研究に対する特徴を有しており、他研究と比較し、より詳細な高齢者の生活実態から考察を試みるものである。

1-4. 調査の概要

調査は、ヒアリング調査と観察及び実測調査の3つによっており表1に詳細を記す。

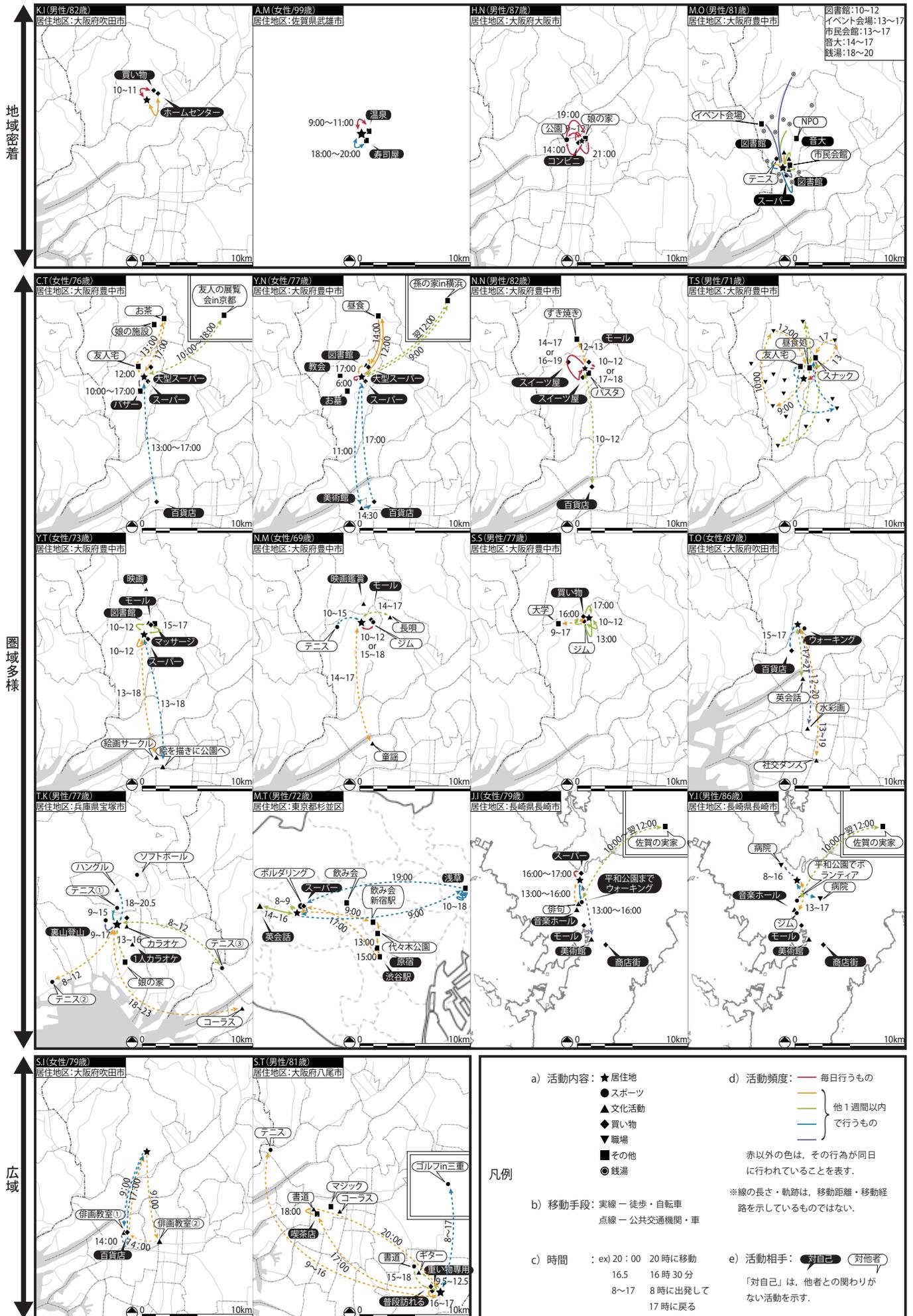


図1 調査対象者の行動パターン

宿泊者がいる場合、2階を宿泊スペースとするため、生活行為は1階で行われるが、いない場合、2階にパソコンがあるため、2階にも生活が展開される。

Y.N と C.T は同マンションで暮らす 40 年来の旧友である。Y.N は長女と同居をしているが、長女は 2 年前に他界した夫の前妻の子供であり、かつ結婚してすぐに海外生活を始め、昨年帰国したばかりである。そのため一緒に生活をした期間は数ヶ月しかなく、ほぼ他人のため、極力顔を合わせない生活をしている。そして夫とは他界する数年前から関係が悪化しており、C.T 宅で生活をしてきたことから、その習慣が現在で

も継続している。接客スペースも C.T 宅に設けているほどであり、Y.N の孫の友人を C.T 宅に宿泊させたこともある。なので自宅は就寝のみの場所となっている。一方で C.T 宅は、そうした来客があった場合は、西側居室に布団を敷いて宿泊してもらう。その居室は普段は、C.T の趣味である裁縫のための空間となっている。

K.I と S.I, Y.I と J.I は、各々食寝分離されているが、前者は夫婦が同じ空間で寝ていることに対して、後者は別居室で寝ている。両事例ともに夫婦計 4 名の趣味のための場所が設けられていることが特徴的である。

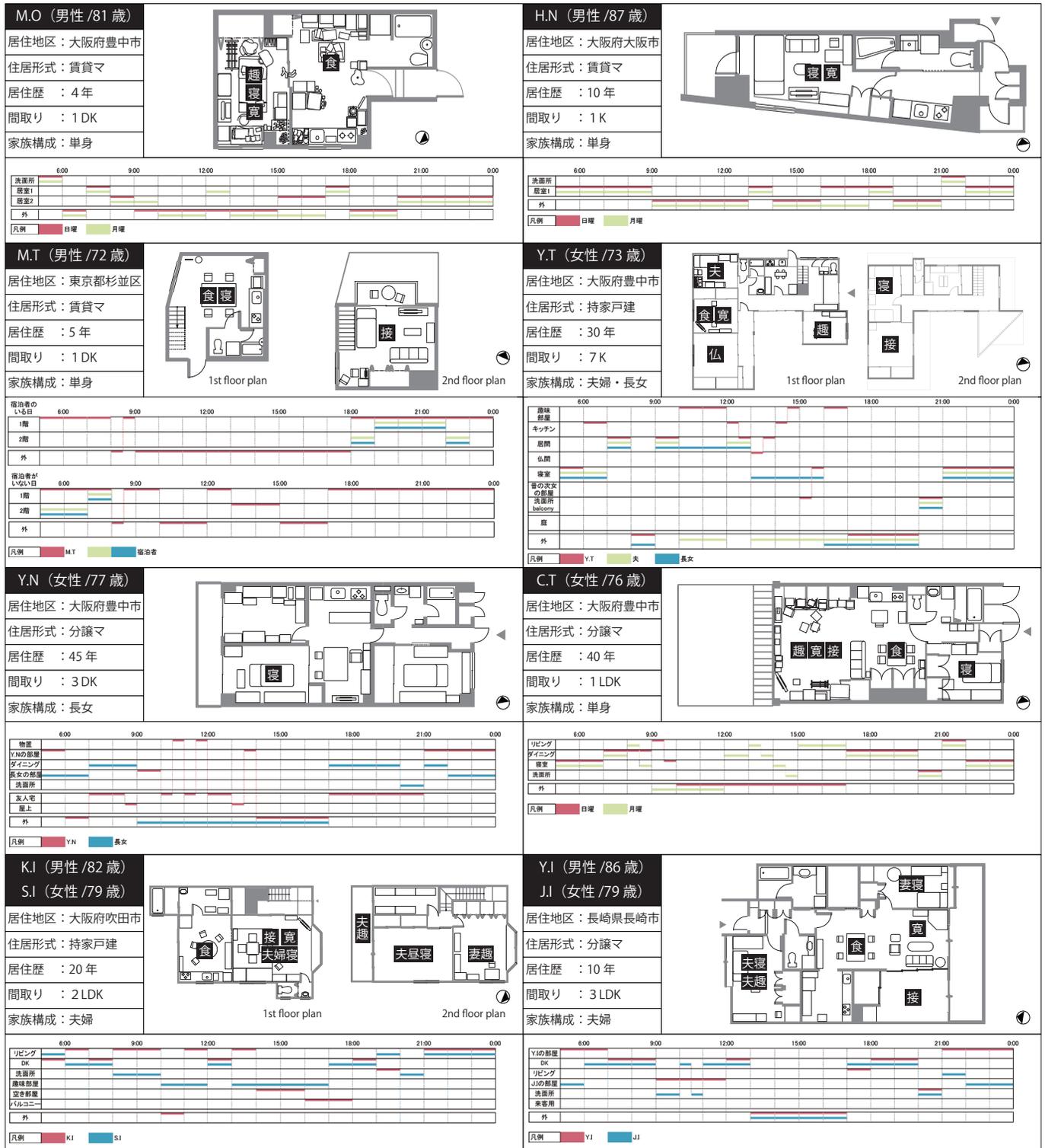


図2 調査対象者の住生活の概要

4. ASの行動パターンと住まい方の連関

4-1. ASの外出目的と行動圏の関係

本節では外出目的と行動圏を分析し、それらを類型化する。外出目的に関しては、自己研鑽・交流・社会貢献の3タイプに分類し、行動圏に関しては、地域密着・広域・圏域多様の3タイプに分類した(図3)。

4-2. ASの行動パターンと住まい方にみるライフスタイル

前節において、外出目的と行動圏の2軸で行動パターンを類型化した。それに加え、前章での居室の使い方と設え方の類型化を合わせると、図3における点線で囲んだ4つのグループに分類できる。本節ではその各群の特徴を明らかにする。

①自立自適スタイル(A群)

外出阻害要因がある中で、主体的に生活を構築するスタイルである。本スタイルの3名は、外出行動はするものの、自宅での活動を充実化させていることがアクティブさの本質である。これは積極的な外出をせずとも、支えてくれる家族との交流があるため、展開可能なライフスタイルである。住戸の住みこなしを見ると、自宅内で趣味を展開する場所を有しており、その場所は趣味を最大限に楽しめるよう設えられた場所となっている。また趣味部屋以外の居室は、極力上下階の運動を減らすため、生活行為の場を集中させている。身体能力の低下の結果、住戸内での移動を最小限化する住まい方に自然と変化した結果であると言える。

②自立活発スタイル(B群)

自立度が高く、外出行動の内容は趣味・余暇活動から地域活動・買い物と様々で、自宅内外問わず、多様な活動に精力的に取り組んでいる。男女・年齢層の割

合に偏差はなく、幅広い性別・年代が該当する。住戸の住みこなしを見ると、各住居が他者を招待できるよう工夫を施している。Y.T, M.T, J.I, C.Tは来客用空間を居室の1つとし、宿泊もできるよう仕上げている。Y.Nは接客空間は自宅に有していないが、友人であるC.T宅を利用できるため、他事例と同様宿泊空間まで整っていると言える。また住戸内での、食・寝・接客・寛ぐ・趣味の場所が分散された住まい方をしており、目的別に使い分けて住みこなししていることも特徴。

③外部依存スタイル(C群)

外出頻度・時間が共に多く、日常生活行為ですら自宅外で行うライフスタイルである。外出行動の内容は趣味・余暇活動や地域活動などで、1日の大半が外出で、在宅時は概ね食・寝のみである。生活行為においてM.Oは入浴を銭湯で行い、H.Nは食事を娘宅でするなどで、自宅が全生活行為の場であるという認識がない。両名には、単身・男性・後期高齢者・賃貸・外出阻害要因無などの共通点が見られる。住戸の住みこなしを見ると、設えは必要最低限でありながら、それすら大半が使われていない。また間取りも小さく、この間取りがゆえ、自然と外出せざるを得ない状況となっていると考えられる。

④他者尊重スタイル(D群)

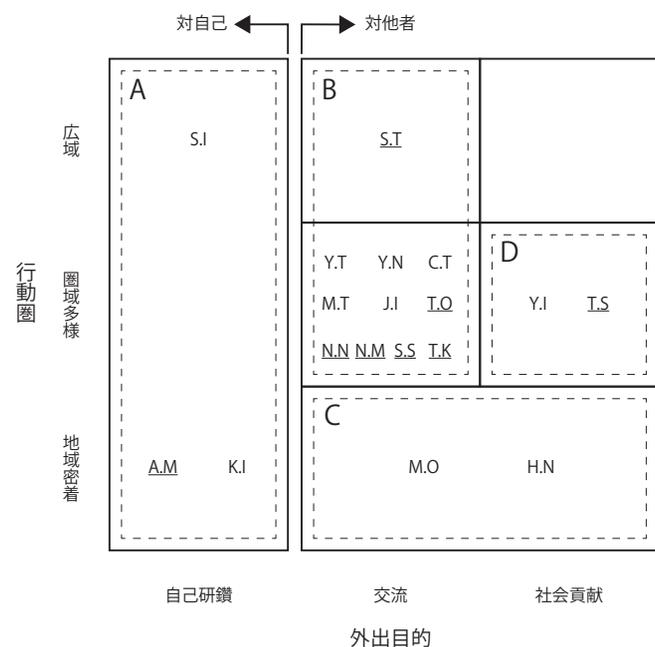
現役の就労者で、スケジュールは仕事が基本のライフスタイルである。外出行動は仕事を除くと、共通点は見られない。Y.Iは地域活動にも精力的に参加しており、仕事以外でも外出する機会を設けていた。属性は、男性・分譲・家族が市外などの共通点が見られる。住戸の住みこなしを見ると、住居内では寛ぐ場所をはじめとする自分の居場所は限られており、住居内の全居室を利用せずに生活を展開していた。また住居内では考え事などをする機会が多いことから、必ずテーブルや机を前に寛ぐなどしていた。

5. ASのライフスタイルと要介護時の生活における所望の連関

本章では、現在は自立度も高く精力的な活動を行っているASが、自立度が低下した際や介護が必要になった際に、どのように過ごしたいのかについてまとめる。その上で、その所望と前章で示した4種のライフスタイルには連関が見られることから、ヒアリング結果と共にライフスタイル別に特徴を示す(図4)。

5-1. 自立自適スタイル

本タイプに該当する3名全員が、在宅介護を希望していた。支えてくれる人が近くにいる安心感を有するのが、本タイプの1つの特徴であり、それゆえ在宅介護を現実的に補足していた。また3名とも住居形式が持家戸建、居住歴は25年以上であり、在宅時間も長



※名前の下にアンダーバーがある人は、住まい方未調査 例) A.B

図3 外出目的と行動圏の関係と分類

いたため愛着も湧いており、それらも在宅介護を所望する一因だと考えられる。

5-2. 外部依存スタイル

本タイプに該当する両名が、親類に支えてもらう保証があることから、それに頼った将来を希望していた。仮に介護が必要になった場合、自宅を手放すことに抵抗はなく、そうした観点で賃貸居住は合理的と言えた。また在宅時間が短く、自宅にさほど重きを置いていないからこそ、そうした選択ができると言える。

5-3. 他者尊重タイプ

Y.I は在宅介護を希望しているものの、現実的には病院生活を覚悟していた。一方で T.S は、自宅での引き続きの生活を希望しており、両名間に過ごし方や介護時の住まいに関する所望の共通点は見られなかった。しかし Y.I は病院生活であれば、介護時であっても患者目線で研修医の研修を行おうと考え、T.S は自宅での介護希望する理由が、多くの人の庭の剪定ができなくなることであった。

すなわち本タイプの特徴は、たとえ要介護時の生活であっても、他者のための貢献したいという意識が常に念頭に置かれた上での所望、という点である。

5-4. 自立活発タイプ

全員が他人の世話になりたくないと言っており、世話をしてもらおう場合でも、緊密な関係の者に世話をしてもらいたく言っていた。また他3タイプに無かった結果が多数あり、例えば、

- ・肺がんと肺炎の併発の経験がある N.N は病院生活を望んでおり、
- ・M.T や S.T, N.M はまず根本的に将来は考えない、
- ・Y.N と C.T は友人関係のため共助を約束している、
- ・C.T と T.O は補聴器や車椅子などの介助器具で自活、などが得られた。

これらから本タイプは、要介護初期段階では、何とか自力で生活を続け、誰にも介助をされない生活を送り、その後身体が動かない局面を迎えた時には、家族や数十年の旧友などへの介護を希望すると考えられ、極力自活にこだわるタイプだと言える。

1) 自立自適スタイル	
KI	なんでもできへんわな。そんなときには、どういのか介護保険の申請でもやって、来てもらうかやな。あたしもこの家に思い入れがあるんです。父と兄の。だから古い家は娘が1歳の時にこの家買いましたので。
SI	
AM	一緒に住んでる娘が見てくれることになってるんです。だけど、本当にそうならないように、コロッと行くように普段から、外に出たり、ボケないように絵を描いたりしてらんですよ。
2) 外部依存スタイル	
M.O	姪っ子が独身だからその人に手伝わってもらって後を継いでもらって、少しくらい田舎でもいいから見晴らしのいい、将来料理できるような所とか、とにかく見晴らしのいいとこに住みたいね。理想だけの場合によっては5人くらい学生を泊めて賃貸にしてっていうことを考えてる。それでその子たちに面倒見てもらえたらな。
HN	娘の家の3階に私の介護ルームはもう作ってあるんですよ。今の世の中の「ボケてきたら施設に入れる」っていう考えが理解できん。昔は子供が親の面倒をずっと見るっていうのが当たり前やのに、いつの間にかこうなっちゃった。しかもそれにかっこつけてビジネスしようと思う法人も許されへん。だから絶対施設には入りたくないです。
3) 他者尊重スタイル	
YI	もう最悪そうなら、在宅介護がいいですけどね。やっぱり現場で老人ホームの実情は数々見てきてますので、入居者同士の様々事とも多いです。しかし私は料理ができないので、もし息子が一緒に暮らしてくれなければ、病院生活でしょうね。仮に病院に入院したとすれば、研修医の担当を希望します。みっちり指導してやりますよ。当事者意識を持って。
TS	順当にいけば、杖ついて、足動かんになったら車いすやる。んで、次はリクライニングベッドか、あの起き上がったりするやつ、何が言いにくいって、自分の家がええっちゃうこと。せっかくここまで作ってきた庭おいて施設とか入れられへん。誰の庭世話したええねん。

6. 結論

本研究から現行の社会・福祉政策と高齢者のライフスタイルの乖離が解明できた。

昨今、手厚い介護や設備の充実化を図ることで、高齢者のニーズに応えようとする高齢者施設が蔓延している。そうした一方で継続居住を目指した在宅介護が推進されており、そのための地域包括的な制度も提起されてきているが、これらは未だ高齢者の生活を施設や制度の枠組みで捉えている。しかし高齢者のライフスタイルや価値観は、要介護度や生活自立度などの客観的指標などで杓子定規に捕捉できないほど多様であることが明らかとなった。そうした高齢者を社会・心身上の弱者と捉え一方的に保護する‘受動型福祉’は、これからの高齢社会に適合しないことは明白であり、今後は、多世代混住の中で各人が有する能力の相補による‘協働型福祉’への移行と、既存の浸潤した思考の転換が肝要である。その実現のためには高齢者の生活を地域単位で捉え、住宅もサポートも自由に選択できる仕組みが必要である。そうすることで高齢者の身体機能が低下した際の多様な所望にも柔軟に対応できる社会をつくりあげることができる。

本研究の課題は、事例を増やし、より一般化を図ることである。また本研究では各事例の居住地区の都市構造・環境に関する考察はなかったものの、それらとライフスタイルとの連関も見られるという仮説のもと、そうした観点の分析も必要とする。

参考文献

- 1) 尾崎有輝・山崎寿一：地域における高齢者の生活行動と居場所の特性—神戸市灘区六甲道地区を対象として—、日本建築学会近畿支部研究報告集、2009
- 2) 持田美沙子・鳥飼香代子：高齢者の住まい方と居住継続のための地域交流について —「一人家族」世帯の住宅計画（その5）—、日本建築学会九州支部研究報告 第53号、2014.03

4) 自立活発スタイル

Y.T	介護施設以外ならどこでも、人の世話にはなりたくない。うちも業で止められるって聞いて、絶対嫌だったって。
Y.N	それももう決めてるんです。お互いに介護し合おうって言うてお友達が、ほとんど一緒に住んでるようなもんなんですけどな。その人と、何かあったら、娘も同じマンションだし何かはなるとも思います。
C.T	とりあえず、補聴器、車いすを使って家で生活しようと思ってます。こんなけリビング大きかったら、介護くらいできでしよ。1階だし。しかもY.Nと支え合うことになるとも思います。これからは、それでも無理になったら、もう無理でしよ。
M.T	本当に何も考えてないんですよ。資産を残すような生活の仕方もしてきてないし、カート押してる人たちがばっかりのところが行きたくないね。病院もね……
J.I	本当は息子家族にみてもらいたいですね。というのも施設なんかに入ったら、もう自分じゃなくなりますよ。私はいつも言ってるんですけど、「身だしなみはきちんとしよう」って。けど、施設なんか入ったらずっとパジャマでしょ。自分の家だったら、起きた時から夫はワイシャツにスラックス履いてるんですよ。私だって、化粧を絶対しますし、そんな風にしたいです。
T.O	やっぱりやと最近こまでお友達が増えたんだし、施設に入るとかして、減らしたくないですよ。車いすでも乗って、出かけるなら、そうすれば会えますしね。
N.N	もう一旦肺腫・肺炎だったんで、次が来たら病院ですわ。残念ながら。
N.M	全く考えたくない、言えることは施設は嫌ってことだけ。あんなの、目の前で車いす乗る人が増えていくのがよくない。
S.S	施設とかは嫌ですわ。年寄り扱いされるのが嫌なんです。せめて80超えたらあたりからでしょ。老いを感じるの、まだまだいいですよ。
T.K	施設に入るって画一的になる。家に住んでると自分の部屋があって庭があって、その世話をしたり、世話をすることによってというような幅広いことができなくなったり、やっぱり一つの団体生活という物があるの拘束されるので、極力家からは出たくない。自分は死ぬまで家。這ってでも生活できるからね。
S.T	考えないということがいいんだよ。考えないとあかんねえ。ふむむむって結局考えてない。

図4 各ライフスタイルの要介護時の生活の所望

討議

討議[瀧澤]

まずライフイノベーションという言葉について、まずわからないので、1つと。多様だということはわかった。協働型福祉にしたいということはわかった。結局何をサポート、例えば施設じゃなくしていろんな支援の有り様があるのかなという。そのところを具体的に言っただけですか。

回答

旧来の高齢者、すなわち支えられる人という思考からこれほどまでに多くの思考を持った人が現れ、高齢者のライフスタイルに革新が起こったということとして定義付けています。協働型福祉に関しては、一律に施設の提供をすればいいのではないと思っています。例えば、自立活発型タイプにあたるY.NとC.Tは高齢者同士の相補により暮らしている、アクティブシルバーの先導的な住まい方であるシルバーシェアの可能性を示唆しているんですけど、こういった場合に関しては、1つは住宅の提供が必要です。一方で例えば、自立自適型。自宅内で生活を完結させたい人らは、他者のサポートであっても受けて構わないと言っているので、そういった人たちには、ソフト面でサポートをしていくなどして、個々人に合ったサポートが肝要です。包括的なものではなく。

討議[瀧澤]

このニーズを捉えて、どうしていくっていうイメージとかはありますか。

回答

どうやれば抽出できるかという点に関して、分析は及んでいないが、一律な捕捉ではなく柔軟かつ多様に高齢者を捉えるということで結論にはしました。

討議[徳尾野]

抽出した事例の位置付けはどのように考えていますか。高齢者は多くいる中で介護されるものそうでないものと二分した時、研究対象にした十数人の対象者はどのように位置付けられているのか。

回答

高齢者全体の中でのということですか。

討議[徳尾野]

はい。

回答

例えば、高齢者全体で見た時は、要介護度がない、そしてASとして定義した積極的な社会活動などを行っている方として位置付けているので、一般的かつ抽象的に言うと、元気な人と位置付けられるかもしれないです。そういった人たちの中でも多様であるということが分かったので、その時に高齢者全体でみると、より多様で、しかしその多様な中で一律に支えられる人と捉えるのはまずいと考えました。

討議[徳尾野]

協働型福祉を推進しようとする、多様なニーズの的確な把握が必要。そのときにこの事例を見つけてきた時などの苦労もあったと思うが、それはどうやれば把握できるのか。困っている人は、要介護度で認定されてわかる。そうでない時は多様な元気な高齢者をどうやって把握するのか。

回答

パツと出てこないです。けれども、そうしたときにそのニーズを抽出する方に関してはこれから考察検討していきたいと考えます。

討議[瀧澤]

老人って急に弱るけど言ってることがそのまま続くのかということがある。

回答

実際私が調査した中でも去年調査して、今年亡くなった方もおられます。そういった方々に話を聞いていると、これからの将来を考えないだとかいう方もいました。けど、そういつている方がそうとは限らないですよ、はい確かに難しいです。